

島根県の地震

令和7（2025）年1月

・震源要素（緯度、経度、深さ、マグニチュード）は暫定値です。後日、再調査のうえ修正されることがあります。

・本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。

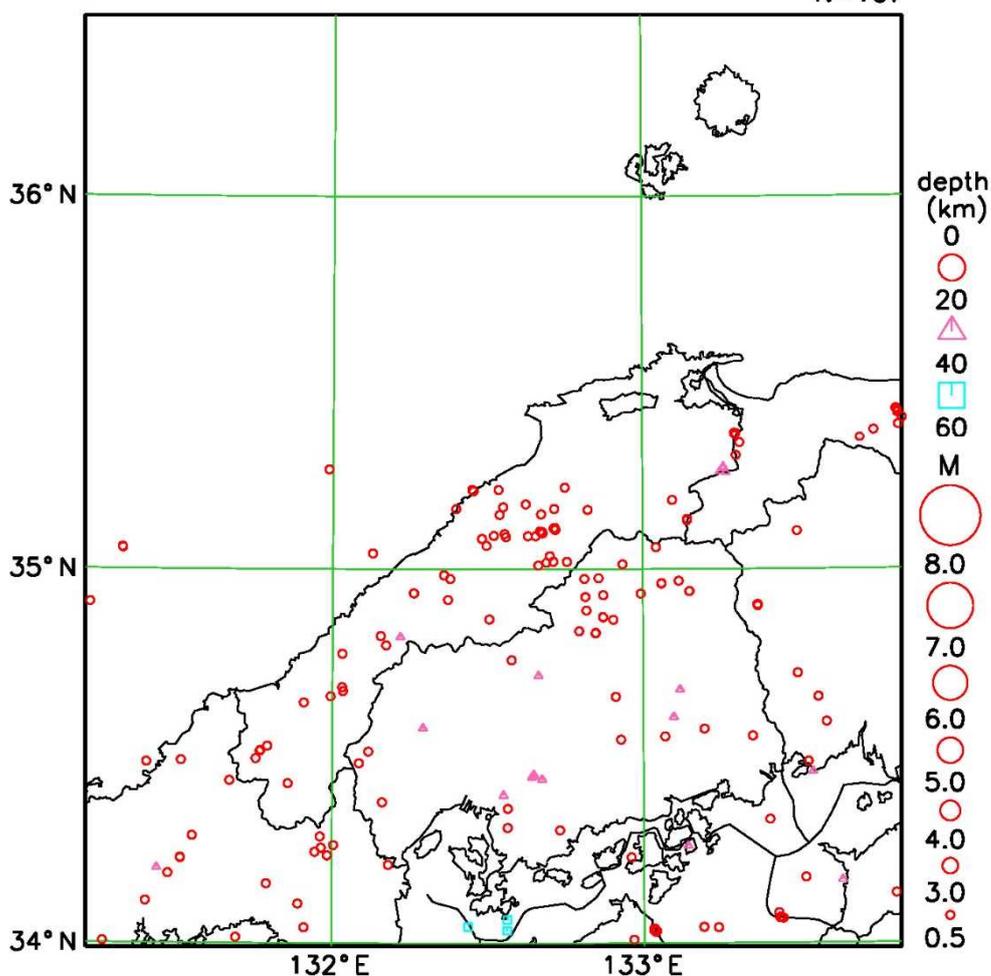
また、2016年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、2022年能登半島における合同地震観測グループによるオンライン臨時観測点（よしが浦温泉、飯田小学校）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

松江地方気象台

島根県およびその周辺地域の地震活動 2025年1月1日～31日

2025 01 01 00:00 -- 2025 01 31 24:00

N=167



[概況]

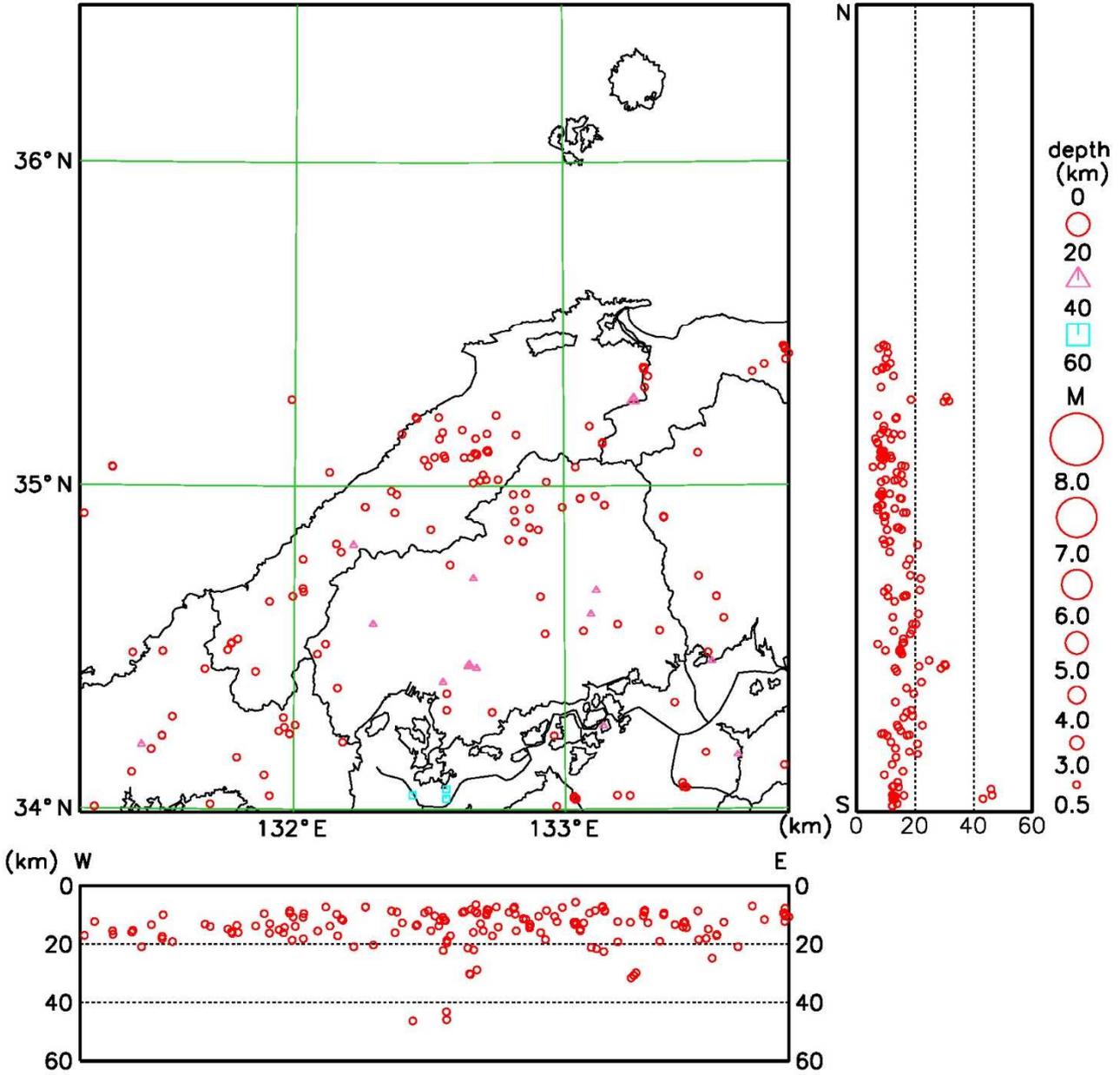
今期間、M0.5以上を観測した地震は167回（12月は189回）でした。

また、島根県内で震度1以上を観測した地震は、1回でした。

13日21時19分 日向灘の地震（深さ36km、M6.6：地図範囲外）により、出雲市・浜田市・益田市・大田市で震度3を観測しました。また、宮崎県高鍋町・新富町・宮崎市で震度5弱を観測したほか、東海・甲信越・北陸・近畿・中国・四国・九州地方で震度4～1を観測しました。この地震はフィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生しました。

[断面図]

2025 01 01 00:00 -- 2025 01 31 24:00



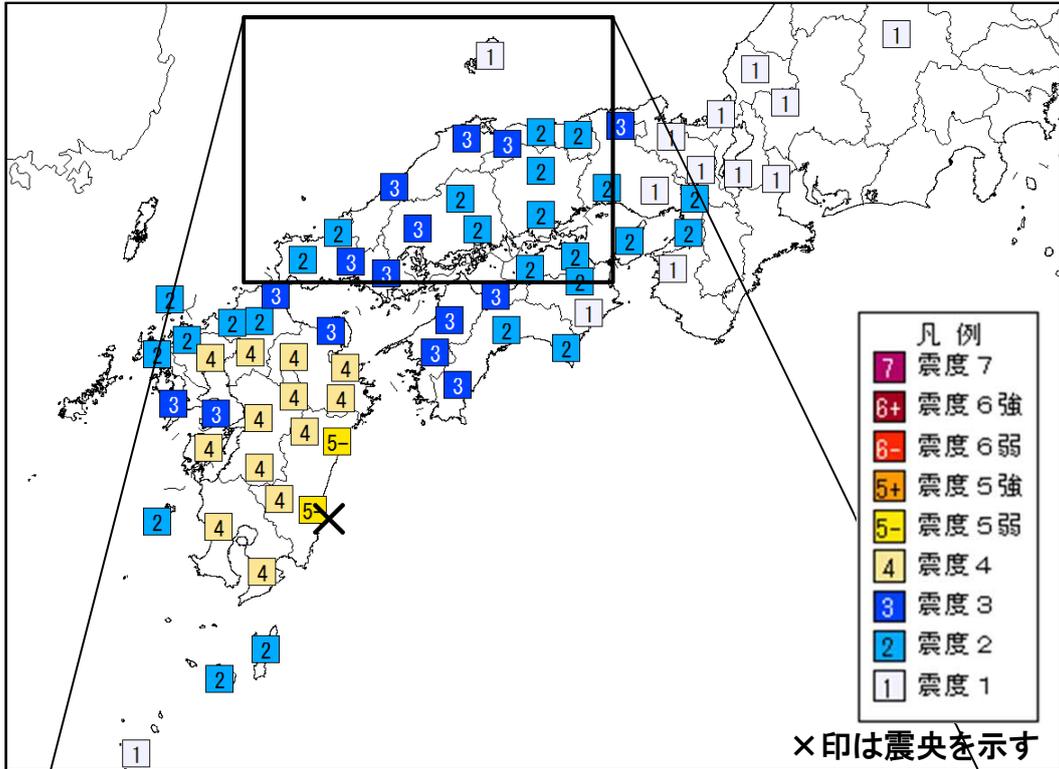
1月の島根県内の地震表（震度1以上）

発震日（年月日時分） 各地の震度（島根県内のみ掲載）	震央地名	緯度	経度	深さ	マグニチュード
2025年01月13日21時19分	日向灘	31° 49.7' N	131° 34.2' E	36km	M6.6
----- 地点震度 -----					
島根県	震度 3：出雲市塩冶有原町*，出雲市平田町*，浜田市殿町*，益田市常盤町* 大田市仁摩町仁万*，大田市大田町*				
	震度 2：松江市学園南*，松江市八束町波入*，出雲市今市町，出雲市湖陵町二部* 出雲市斐川町上庄原*，出雲市大社町杵築南*，安来市安来町*，江津市桜江町川戸*				
	震度 1：松江市西生馬町，松江市西津田，松江市鹿島町佐陀本郷*，松江市玉湯町湯町* 松江市東出雲町揖屋*，松江市宍道町宍道*，出雲市坂浦町，出雲市多伎町小田* 出雲市佐田町反辺*，雲南市大東町大東，雲南市三刀屋町三刀屋* 雲南市加茂町加茂中*，雲南市木次町里方*，浜田市大辻町，浜田市金城町下来原* 浜田市三隅町三隅*，浜田市旭町今市*，浜田市弥栄町長安本郷*，益田市匹見町石谷 益田市水分町*，益田市匹見町匹見*，益田市美都町都茂*，大田市温泉津町小浜* 江津市江津町*，川本町川本*，津和野町枕瀬*，島根美郷町都賀本郷*，邑南町淀原* 邑南町下口羽*，邑南町瑞穂支所*，吉賀町六日市*，吉賀町柿木村柿木* 隠岐の島町西町，隠岐の島町下西*，隠岐の島町布施*，隠岐の島町都万*				

・地点名の後に*がついている地点は、地方公共団体または国立研究開発法人防災科学技術研究所の震度観測点です。

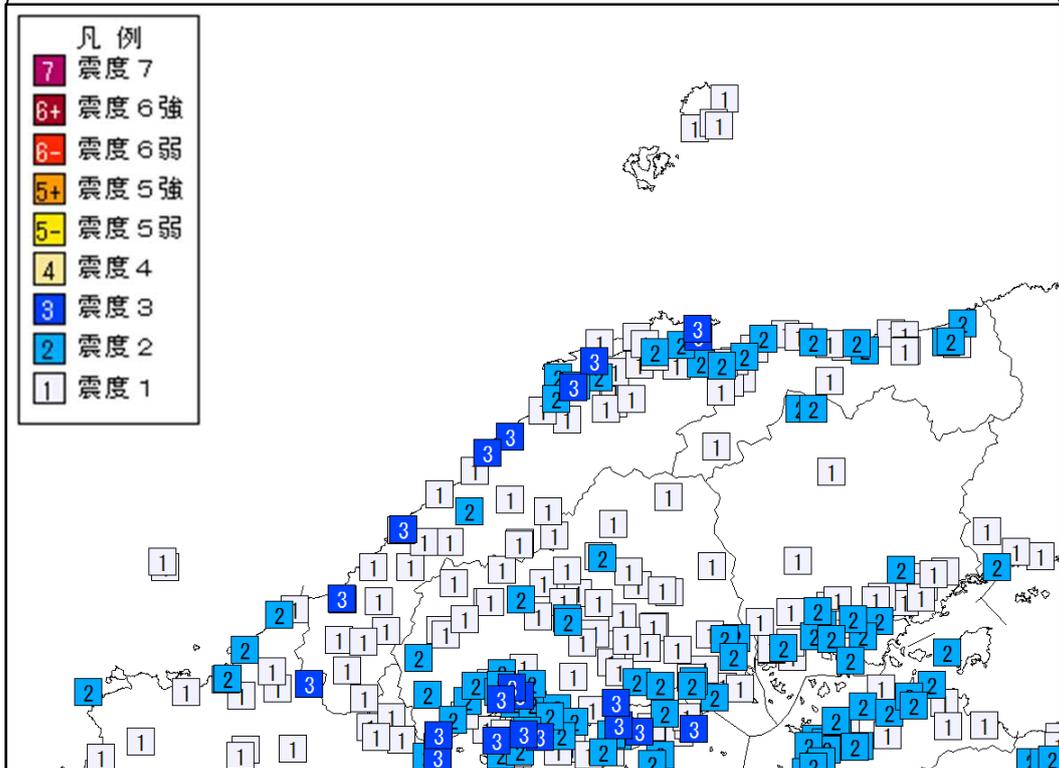
【地域震度分布図】

2025年1月13日21時19分 日向灘



【観測点震度分布図】

地域震度分布図枠内拡大図



長期評価による地震発生確率値の更新

～令和7年1月15日公表～

政府の地震調査委員会は、主要な活断層や海溝型地震を対象に、地震の規模や一定期間内に地震が発生する確率を予測したものを「地震発生可能性の長期評価」（長期評価）と呼び、毎年1月1日に算定し結果を公表しています。

このうち海溝型地震における評価対象の一つである南海トラフ沿いで発生するマグニチュード8～9クラスの地震については、今後30年以内に発生する確率が、これまでの「70～80%」から「80%程度」に更新されました。

南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）に基づく発生確率値の更新前後の比較（算定基準日 R7.1.1）

	2024年1月1日時点の評価	2025年1月1日時点の評価	海溝型地震のランク分けの凡例	
M8～M9クラス	Ⅲ*ランク	Ⅲ*ランク	ランク分け	30年以内の地震発生確率
平均発生間隔	88.2年		Ⅲランク (高い)	26%以上
ばらつきα	0.20-0.24		Ⅱランク (やや高い)	3～26%未満
経過率	0.88	0.90	Ⅰランク	3%未満
10年	30%程度	30%程度	Ⅹランク	地震発生確率が不明（過去のデータが少ないため確率の評価が困難）
20年	60%程度	60%程度	算定基準日における地震後経過率が0.7以上である海溝型地震についてはランクに「*」を付記する。	
30年	70%～80% (74%～81%)	80%程度 (75%～82%)		
40年	90%程度	90%程度		
50年	90%程度もしくはそれ以上	90%程度もしくはそれ以上		
100年	90%程度以上	90%程度以上		
300年	90%程度以上	90%程度以上		

◆ ランク分けについて

上の表内に「Ⅲ*ランク」とあります。「Ⅲランク」は今後30年以内の地震発生確率が26%以上に相当します。以前は確率のみを公表していましたが、確率が何を意味するのか分かりにくい、また確率が低い場合は「地震のリスクが小さい」といった誤った印象を与えるおそれがあることから、平成28年（2016年）熊本地震以降、長期評価にランク分けが導入されました。また、「*」は地震後経過率が0.7以上の場合に付記されます。つまり平均活動間隔に近いことを示しています。ちなみに南海トラフの地震の場合は、1946年の昭和南海地震から平均活動間隔である88.2年が経過すると、地震後経過率が1.0となります。

◆ 地震発生確率について

今回、地震発生確率が「80%程度」という数字はどのように捉えるべきでしょうか。前回からの確率が10%上がったわけではありません。詳細な算定値は前回が「74～81%」、今回の算定値は「75～82%」となり、細かな値に捉われないよう数字の一桁の位を四捨五入し「80%程度」と表現しています。

いずれも70%や80%という数字はいつ地震が起こってもおかしくない確率です。南海トラフ地震は必ず来る、という視点に立ち、いつ地震が発生しても対応できるよう、機会を捉え日頃からの備えを再確認することが大事です。

○ 令和7年1月15日 地震調査委員会公表「長期評価による地震発生確率値の更新について」

https://www.static.jishin.go.jp/resource/evaluation/long_term_evaluation/updates/prob2025.pdf